「藪の鶯」試論

和田繁二郎

明治二十年頃の文壇の中心にあったのは、饗庭篁村と須藤南翠とであった。篁村の小説には、当時の新しい女性観、あるいは結婚のあり方を取上げたものがあり、また南翠にも政治小説めいたものがあって、多少とも時代の空気を反映しているし、啓蒙的な意図や情熱を見出だすこともできるのであるが、それらは、作者の生活の探究や主体的な認識の裏付けをもつものではなかった。やはり、戯作者的な世相風俗の傍観によるところが多く、従ってその批判的態度、啓蒙的意識にも、古いものがつきまとう結果になっている。篁村のとった中庸主義も、近代的な自覚の上に形成されたものではなく、当時の風俗を現象的に見て、新と旧との中間を行くという曖昧なものに終らねばならなかった。

当時、こういう古い戯作の伝統に立った作者とは別に、西欧近代の学問を学び、新しい人間像を形成しつつあった若い人々によって、人生の諸問題を追求するような作品が現われた。それは「悲風惨風世路日記」（一八八四明治一七）あたりにはじまるものと見られるが、逍遥の「書生気質」（一八八五明治一八）にもその要素は認められるし、また「妹と背かがみ」（一八八五明治一八）にも、その結末の悲劇性にもかかわらず結婚の理想について示唆するところがあった。これらには、まだ多分に戯作的な風俗描写や、偶然性の多いプロットを認め得るのであるが、それをかなり拭い去って、若い人達の、人生如何に生くべきかの追求を目指した作品が、この二十年代に入るとともに散見するようになった。そこに二葉亭、嵯峨の屋などの作品を見出すのであるが、いまここにとりあげようとする「藪の鶯」も、その一つに数えられてよい作品だと思う。

「藪の鶯」は、花圃の二十歳の年、明治二十一年の六月、金港堂より刊行されたものである。

この執筆の動機は、後に花圃みずから語るところによれ

ば、[1]一つは金銭を得るためであったという。つまり当時田辺家は家産が傾いて、死んだ花圃の兄の一周忌も行えない始末であった。それを知った彼女が、病床にありながら、多少とも金になるならばと思って書きはじめたという。

これは外的な動機であるが、内的なものとしては、彼女の文学への愛好心があげられるであろう。「藪の鶯」の序文によると、彼女は六歳や七歳の頃から小説を好んで、母にその読み説きをねだったことがあったが、後に学ぶべきことが多くなり、あまり小説に接する機会がなかったが、風邪を引いて臥っている間に、たまたま逍遥の「書生気質」を読んだところが、大変面白くて、とうとうその文体に習って、自分も小説を書いてみようという気持がおこってきて書いたのだということである。前記の花圃の談によれば、「これ位ならば書けると思ひ」書いたという。

右の序文には、つづいて、執筆中、および発刊に至る事情が簡潔に述べられている。彼女は、小説というものは、事実に即さねばならないとは知っていたが、世間の下情については判らぬことばかりなので、下男たちに色々と聞きながら書き進めていった。そのため小説を書いていることが両親に知られてしまった。両親は、小説を書くなどはつまらぬことだけれども、書いてみたのならば逍遥に見てもらったらどうかと言ったので、逍遥のところに持って行った。ところが、大変ほめられ、盲蛇の思いもするが、発表する気になったと言うのである。

事実逍遥が讃めたことはたしかであって、これに寄せている逍遥の序文を見れば明かである。（これは書簡の体裁になっている。）例えば「マダムダアブレーの稚き時の筆のはこびもそぞろに思い出だされて敬服に不堪、当世怖ろしやとたゝへ申候。かくてゆくゆく御出精遊ばされ候はば、私などは申までもなく立派なる方々も恐入るべしと存じまゐらせ候」と言っている。もっとも、少し手を入れるべきところがないわけではなかったので、二三手を入れたとは言っているが、かなり大業なほめ言葉を呈したものである。しかし、当時としては、うら若い女性の作として、極めて上出来の作であったことは否定できないであろう。

この作品のテーマは、当時の若い女性の生き方如何にある。それは皮相な欧風模倣の頽廃を否定し、つつましやかでしかも教養が高く、また自主自立的な生活意志をも備えた女性を理想とするものである。

これをストーリー及び登場人物に即してみると、まず否定される人物として篠原浜子が登場する。彼女の父、子爵篠原通方は皮相な欧化熱に浮かされており、「西洋の娘子は交際を専らとし。芝居見物。夜会。踏舞と昼も夜も遊びくらすものなりなどといへる咄しさへきゝかぢりて。学校の修業などは二の次として。ピヤノ。バイオリンなどの稽古にのみ身をよせさせつ。」というような教育をしたので、浜子はダンスが何よりも好物だという新しがりやで、はね上りのお嬢さんになった。彼女は英語を教わっていた山中正という軽薄な青年と親しくなり、許婚者を捨てて結婚するに至るが、まもなく財産を奪われて捨てられてしまう。

その他皮相な新しさを否定した言葉には、

……明治五六年頃には。女の風俗が大そうわるくなつて。肩をいからしてあるいたり、まち高袴をはいたり。何か口で生いきな慷慨なことをいつて。誠にわるい風ださうでしたが。此頃大分直つてきたと思ふと。又西洋では女をたつとぶとか何とかいふことをきいて。少し跡もどりになりさうだといふ事ですから。今の女生徒は大責任が有のでムり升と。（中略）ナポレオンは。仏国を改良するには善良の母だと申ました。だから女に若も学問をさせなければ。中々善良の母も出来ますまいし。学問をさせれば。厚顔なおしのつよい女が出来ますから。何でも一つの専門をさだめて。それをよく勉強して。人にたかぶり生いきの出ないやうにして。温順な女徳をそんじないやうにしなければいけません。さうすれば子孫も才子才女が出来て。文明各国に恥ない新世界が出来ませう（後略）

というような一節もある。一方理想の女性として登場してくるのは、松島秀子である。秀子は父母を失い、弟と二人で暮している。いささかの遺産があるが、それをへらさぬように内職をし、弟を学校に通わせている。そしてなお向学心をもち、弟の復習の傍らについて、共に勉学するという。この秀子をめとることに決意した篠原勤（浜子の許婚者）の言葉に、「僕の好の女房は。まんざら文盲でも困るが。婦人の美徳と称する従順の徳があって。少く文字も読め斎家の道に勉力してもらひたい。（中略）踏舞の上手より毛糸あみの手内職をして。僕が活計を助けるといふやうなのがほしい。」とも言わせている。

ここに見られる秀子のタイプは、一向に新味のない家庭の主婦で、新しい女性像を、女権拡張運動の闘士あたりにおいている人から見れば、大変物足りないとされるかもしれない。たとえば、片岡良一氏は[2]「ここに説かれている女性としての心がまえが、主として『健全なるホーム』の建設という点にかけられ、それだけ控え目なものになっている」と言い、さらに、「いわゆる『女徳』を重んじて『生いき』にならぬ範囲の内助的なつつましやかさに生きるのが『今の女生徒の大責任』だというような穏かな考え方により強く傾き、そこから前の啓蒙期——乃至政治的激動期にはげしい生き方を示した女性の積極主義を、『まことに悪い風』だったと非難することになっているばかりか、それが開化主義の女主人公浜子をみじめな破局に導いてゆく

一方、つつましやかな秀子にしあわせな境涯を持たせることになっている」と言って、新しい女性とされた浜子に同情している。そしてさらに、「政治的変動期であった啓蒙時代には、解放を求める進歩的意欲のはげしさを生きた女性などもぽつぽつあらわれていたのであったし、そういう現実を反映して、その頃の文学、殊に政治小説にはそういう女性の投影も相当に認められたのであったが、そういうところからの名残りを、作者としての視野の広さや個性的な道を追求しようとする意欲などに示しながら、一方にはこうして女徳やつつましやかさを強く要請しようとする折衷主義に傾いて来たところに、即時代的な後退があったことになろう」と結論づけている。

ここに述べられた片岡氏の見解をすべて否定しようとは思わないが、そこにはいささか誤解もまじっているように思う。「前の啓蒙期――乃至政治的激動期にはげしい生き方を示した女性の積極主義を『まことに悪い風』だったと非難する」といっているが、この『まことに悪い風』というところは先に引用したところに明らかなように、これは「明治五六年頃」のことなのであって、女性が、とくに自由民権などの進歩的な思想や政治の面で示した動きを指しているのではないのである。

「開化評林」[2]という当時の新聞の論説を抜萃した書物に、明治五年の項として「女子洋装の説」という文章がのっている。それによると、当時、斬髪令が出て、女までが髪を切ったということである。それにつづいて、「又別ニ洋学女生ト見ェ、大帯ノ上ニ男子ノ用ユル袴ヲ着シ、足駄ヲハキ、腕マクリナドシテ洋書ヲ提ケ往来スルアリ。如何ニ女学生トテ、猥ニ男子ノ服ヲ着シテ活気ガマシキ風俗ヲナス事、既ニ学問ノ他道ヲ馳セテ、女学ノ本意ヲ失ヒタル一端ナリ。」と記している。これらの風俗は皮相な開化によるはね上り現象であると認められる。いま「藪の鶯」の中で述べていることは、思想的な古さ新しさの問題よりも、むしろ思想のないところに見られる風俗上の無軌道ぶりなのである。だからその現象を、進歩的積極的と見ることもあたっていないし、また花圃が「進歩的積極的」なことを否定したとすることもあたらないのである。たとえその風俗の根底に、何らかの進歩的積極的な思想があったとしても、いま問題ではないし、さらにまた、それらが客観的に見て現実に足をつけたものでなかったことは否定できないであろう。

さらに言えば、みじめな破局を与えた浜子という人物は、別に思想的に新しい女性として設定されたものではない。どこまでも浮上った欧化主義、否定されるべき浅薄な欧化主義の表象として設定されているのである。決して進歩的な意義をそこに見出そうとはしていない。この浅薄な欧化主義に真に進歩的なものを認め得ないことは既に論じるまでもないことであって、後述するように、ここに花圃の良識を見ることができよう。

また、女徳やつつましさなどを希んだということは、あるいは折衷主義の後退になるかもしれないが、つつましさ自体、それは人間の持つべき美徳の一つであって、必ずしも後退とは称し得ないものである。一歩譲って、後退を認めるにしても、それは女権拡張というような闘争の姿勢を解いて、平和な表情を発揮しようとするものであって、そこには、男性への素朴な信頼が見えており、そこにロマンチックな甘さがあると言えばそれまでだが、そこにこそこの作品の理想主義の明るさがあるというものである。女徳を発揮しつつ、しかも幸福にゆけたら何よりではないか。作中の秀子をめぐる男性は、凡そ女性を虐げそうな人物としてはあらわれて来ない。そういう条件のもとに出された設定であるから、必ずしも後退と難ずべきものではない。もし強いて非難するならば、男性の現実を甘く見た、非現実性を指摘すべきであろうが、それも、ここでは、人間同志の信頼に発した理想主義のもつ明るさに、むしろ積極的意義を認めるべきだと思う。

この欧化主義の浜子をみじめにさせたことについては、塩田良平博士も「花圃はこういう女性に好意を持ち得なかったせいか、浜子に流れている人間の自由意志を健全に発達せしめてやろうとする熱意を持たなかった[4]」と言っておられるが、これは花圃の意図を無視した発言のようである。つまり花圃の見解は、浜子のように自由が放縦に流れてはならないのであって、良識の上に立った自主と自律とを持つべきことを要請しているのである。いわば「人間の自由意志を健全に発達」させたところに表われてくるのは、浜子ではなく他ならぬ秀子であったのである。この自由意志のことは、作者花圃の結婚という実践において、見事に開華しているのではないか。彼女の三宅雪嶺との結婚について、「花圃の偉いのは、一代の哲人三宅雪嶺を夫として選んだことだ。花圃は才色双美おまけに田辺家は名家と来てゐるから、貰い手も望み手も随分あったろうが、その数多い紳士、ブルジョァ子第の中から蓬頭垢面、冬は単衣を五枚も重ねて着ているという仙人じみた哲学者を選んだ。而かも見事に選びあてたのだ。この眼識だけは、彼女の最大傑作だと思う。[5]」と柳田泉教授が賞めておられるのも、この自由意志の健全な発達への讃辞と受取りたい。

このような女性の生き方についての考え方の他に、この「藪の鶯」の中で、花圃の触れている思想は、かなり巾広く色々な面に表われている。ことに、その根底にあるもの

は、当時の藩閥政権への批判、なかんずくその欧化主義への批判である。右の欧化女性への非難もこの埒外に出るものではない。

浜子の父、篠原通方について、次のように書いている。

主人の公といへるは。西南某藩の士にして。維新の際人に勝れたる勲功のありし由は。門に打たる標札に。従三位子爵某と昨日今日墨黒に書たるにても知りぬべし。さればその昔し尊王を唱へ攘夷を説き。四方に奔走せし折は。西洋文明の国々をも。醜夷と卑しめ黠虜と罵りし癖の。いま開明の世運に際するも。まだぬけかねたるを。同じ藩士にて。今内閣に時めきたる親しき人々が。かくては遂に世の風潮に後るべし。官職を帯びて洋行し。西洋各国を巡視せば。必ず悟る所あるべしとの勧めにより。一歳欧洲に遊歴せしに。帰朝の後は打て変りたる洋癖家となり。我国の食物は衛生に害ありとて。専ら西洋の割烹を用ゐ。家屋も石造玻窓にかぎり。衣服は筒袖呢布ならでは着するを厭ひ。家の婢僕に至るまでも。我国振の衣服を着せしめず。皆洋服の仕為着を用ゐしむるまでにして。一も西洋二も西洋と。かの風俗をのみまなぶことゝなりぬ。

この戯画化めいた筆致よりしても、ものの道理に暗く、軽薄な人間として欧化主義的人間を描いていることがわかる。そこにまた薩長閥専制への批判をも匂わせているのである。また欧化主義の一般的な批判として、「日本人はメスメリズムにばかされた人のように。西洋人の指先次第。いろいろなまねをする」と、日本人の自主性の欠除を突いているし、また勤に「僕は西洋の学問と芸術には感心するが。風俗には決して心酔はしない。」と語らせている。

また欧化政策をとる上流階級の人々が風紀を乱していることにも指弾の筆を向けている。篠原家の車夫と馬丁との会話に、山中と浜子との情事を噂したあとで、位の高いところは大概乱れていると言い、「今の時代は、道楽時代という時代だとヨ。女といちゃつきたい時は西洋風を持出すし。権妻を置きたい時には昔風を持出すし」云々と言わせている。

これに続いて注目すべきことは、官員への批判である。

官員といへば山中はどうしたらう。此節は役所のはぶりがいゝとかで。等も進んださうだ。仕方のない男だが。あんなのが人気にあふのサ。まア僕等の学術上で分析すれバ。ゴマカシュム百分の七十に。ヲペッカリュム百分の三十といふ人物だ。

ここには、多分に冗談じみた表現がとられているが、当時の専制政府の官吏の腐敗を突いたものとして見のがすことはできない。また官員よりも、技術者の方が世に益するところが多いとして、ワシントンよりもフランクリンを、ビスマークよりもレセップスを高く買うと言っている。これは当時の資本主義興隆期における技術者の位置に注目したものであるが、科学振興のもつ社会的効用を重視したものと見るべきであろう。この科学振興に関係して、学問の効用についても説くところがある。秀子の家主宮崎一郎の母が、秀子の弟葦男に向って「そんなによく出来たら今によい官員さんにおなりだろう」といったのに対して、宮崎一郎が「おっかさん。そんなことを子供にいい聞かせると。とんだ間違いの種に成り升。葦男さん。学問は官員になって月給を取るためではない。此社会に利益を与へる人になるためにするのだ。」と言っている。ここに立身出世主義のエゴイズムに対する明確な否定が語られている。

また、松島秀子が、毛糸編みの内職をしていることを、弟の葦男が恥じるような言い方をするところで、宮崎は、自分で働くことは決して恥ずべきことではないと言い切っている。つまり「人は己の力で食なければならない。姉さんはほんとにえらいもんだ」と讃めているのである。これなど、自主自立の精神を明確にしたものとみるべきものであろう。その他、未亡人の再婚を喜ばぬ当時の風潮に対して、明瞭に再婚を肯定し、人間性に添うものであるとしているところなどがある。これも当時では進歩的な発言とすべきであろう。

このように、「藪の鶯」には、当時の政治より風俗に至る巾広い分野にわたって、その皮相浅薄な様相が批判され否定されており、しかもその基底に、時代の真の近代化・民主化をはばむ絶対主義政府への批判が蔵されているのであって、「藪の鶯」は時代の真実につながる高さを保った作品としなければならない。前述したように、一見その折衷的な微温さをもった健全なホームの建設や女徳の涵養のことも、実は下からの国民の手による自主的な近代生活の翹望を示す声であったことを見のがしてはならないと思う。というのは、一方の女権拡張の運動が、当時の諸条件のもとでは、とうてい実を結ぶことのできないところの、所詮はね上り現象にすぎなかったことと考えあわせてみればよいと思う。また刊行当時、自由党員から多数、共感と讃辞の手紙が著者のもとに届いたという事実[8]もあり、やはり国民の声に背かぬものであったとしなければなるまい。

なお、これらの花圃の批判的態度や見解が、どうして養われ、彼女のものになったかについては、彼女の読書も力あったことと思われるが、彼女の父からの影響は見のがされてはならないと思う。彼女の父、蓮舟田辺太一は、幕末から明治へかけて活躍した外交官であった。彼は儒学者として甲府徽典館の教授となり、つづいて外国方に任ぜられ、福沢諭吉らとも親交を結んで、海外の事情に精通していた。元治元年より明治四年にわたって、両三度ヨーロッパに赴いており、単に学問上の知識に止らず、身を以てヨーロッパの文化風俗に接したのであった。そのような点より、当

時の生半可な欧化熱には組することができなかった。またそれに彼は幕臣であるという立場より、薩長閥による明治政府には、かなり批判的であり、多くの不満を持っていた。花圃が「父が幕府の出でありましたので薩長の政治を喜ばず、花柳の巷に入りびたり、そのため家産も傾き」[7]云々と言う通りであったのである。ここに官吏への批判、欧化政策への非難も、父よりそのまま花圃のものとして伝えられたと見ることができると思う。

はじめに述べたように「藪の鶯」は、人生如何に生くべきかを追究した作品であり、しかもそれは右のように、当時の現実に密着しつつ果されているのであって、その点、近代文学の本質を備えたものといい得るのである。もっとも、その結構や人物形象の点で、戯作的な面を残しており、完璧なものとすることはできない。たとえば、勤と秀子との出合いの場合で、秀子が和歌の下書を落してゆくあたりの遇然性がそれであり、また山中や山中の情婦お貞がいわゆる悪玉的な描写を出ていないという類型性などがあげられるであろう。このような欠陥を備えるものではあるが、全体に「藪の鶯」が、当時の青年男女の人生と文学との深いつながりの上に存在を主張するものであったことは動かすことができない。

さらにまた、それが民主化をはばむ欽定憲法であっても、国会開設をひかえての明るい雰囲気を反映する作品として、「藪の鶯」が時代との微妙な接点をもっことにも注目しなければならない。もっとも、そういう接点は時代の客観的な真実を離れるもので、リアルなものでないと言えるかもしれないが、国民の主体性あるいはエネルギーのもつ可能性はなくはなかったのであって、そういう主体的な可能性の真実も、我々は無視してはならないと思う。

事実、花圃は次の作品「八重桜」(二十二年四月)以降、時代一般の悲劇的な作品に傾斜してゆくのであって、その点「藪の鶯」は彼女自身にも記念すべきものであったのである。

注

① 「藪鶯・一葉・桃水」三宅花圃、(国語と国文学、昭和九年八月号)
② 河出書房、現代日本小説大系、第一巻、解題
③ 明治文化全集、第二十巻二四四ページ
④ 「明治女流作家」三宅花圃の項
⑤ 「随筆明治文学」女性作家七人語
⑥ 前掲「藪鶯・一葉・桃水」
⑦ 同右

芥川龍之介のキリスト教観 (二)

――続切支丹物について――

佐々木啓一

(一)

前稿に続いて本稿では、芥川龍之介の「切支丹物」の中期及び後期の作品の解明を試みたいと考えている。

ただここで少しことわっておきたいことは、本論文はあくまで芥川のキリスト教観を総合的に求めるのであって、笹淵友一博士が、「芥川龍之介のキリスト教思想」[1]なる題目で大胆に論述しておられるのとは、若干趣を異にすると共に、それは意識の多様性乃至多層性の一環として求めるべきではなかろうか。なぜなら芥川の作品はどれをみてもおよそ思想的色彩は極めて稀薄なのである。

石坂養平氏は、芥川を評して、「氏の芸術には思想らしい思想を見出すことは出来ない。」[2]とか、人生の矛盾や人間の不注意や運命に翻弄されていることを指摘した作品が数多くあると認めておられながら、「それ等の中から強ひて一貫した思想系統を導き出すのは非常に無理である。」とも、又芥川の対人生の態度がある一面ではなげやり的な心持になっているので、「到底思想的風格は生れないのである。」と論及しておられるのをみても、芥川に関する限りキリスト教思想などと大胆な題目はつけられないのではなかろうか。

註①前稿(一)の①参照。
②全集案内の中の石坂養平氏「芥川龍之介論」より。

(二)

さて、中期の作品の最初のものと考える「奉教人の死」であるが、前出の「尾形了斎覚え書」の女主人公「篠」は、「生きる本能」の前には、母親も現実の生命を克服することができなかったのであるが――芥川流に解釈すれば人間的なものの勝利を見出すのが芸術の論理であるかもしれないが――「奉教人の死」では「仄筆の罪」[1]は見事克服されて、人間と神との間に考えられる矛盾は殉教という自己犠牲によって美しく昇華させている。

「奉教人の死」は、芥川としては相当自信をもって暑い夏の最中に書き上げたらしく、小島政二郎氏宛の書簡に、「作そのものは唯今の所、多少の自信があります。私としては好い方でせう。原稿料[2]